愛知工業大学研究報告
第 52 号　平成 29 年

古英語の文献におけるルーン文字の使用について

The Use of Runes in Old English Writings

船井純平†
Jumpei Funai

Abstract: There are some Old English texts in which runic letters are adopted, and they often draw the reader's attention. However, little detailed research has been done on the use of runes in Old English writings, and there is no consensus of opinion as regards their connotations. This paper treats the adoption of runic letters in Old English writings.

１．はじめに

古英語の文学作品を読んでいると、ラテン文字に加えてルーン文字が使用されている箇所に気づくことがある。例えば、古英語で記された医学書である Bald's *Leechbook* には lencten adl 'spring fever' への対処に関する記述があり、そこではラテン文字とギリシャ文字に加えてルーン文字が用いられている。このようなルーン文字の使用については個別に言及されることはあるものの、当時の作者あるいは写字生が持つ runic literacy がまとめて扱われることは少なく、またコノテーションに関しても意見が分かれている。本稿では古英語時代の作品、写本におけるルーン文字の用例を概観することにより、当時のルーン文字の使用状況とその背景について考察したい。

†愛知工業大学基礎教育センター非常勤講師

２．ルーン文字のコノテーション

まずはじめに、ルーン文字のコノテーションがこれまでどのように扱われてきたのかを見ていくことにする。ルーン文字の用法は呪術的なものと世俗的なものに大別されるが、キリスト教への改宗以前に使用されていた文字であることから、その使用にはしばしば呪術的なコノテーションが想定されてきた。初期の碑文におけるルーン文字には何らかの呪術的なコノテーションを伴っていると解釈されている用例がいくつか存在する。

バルト海南部のゴットランド島で発見された５世紀の kylver 墓棺 [1] には古北欧型フサルクの文字列が刻みこまれているが、この文字列は墓の内側に向けられており被葬者のみがルーン文字を見ることができるようになっている。このことは文字列が何らかの呪術的な意図により刻まれた可能性を示唆するものである。

また、ルーマニアの Pietroassa で他の財宝と共

に発見された 4 世紀頃のものと考えられる金製の指輪の表面にはルーン文字が刻まれているが、その解釈に関しては研究者の意見が分かれている。W. Krause はルーン文字列を Gutani o(þal) wi(h) hailag 'Der Goten Erbgut, geweiht (und) heilig (unverletzlich)' と解釈し、表意文字として用いられている o ルーンはこの指輪を含む財宝を保護する目的で書かれたものであるとしている。[2] 一方、K. Schneider は同じ文字列を gutani o (i)k (i)m hailag 'Der Goten Besitz (o) [ist dies]. Ich bin mit Heilkraft geladen (=heilmächtig)' と解釈し、表意文字としての o ルーンは同じく財宝の略奪を防ぐために刻まれた呪術的なものであるとする。[3] このようにルーン文字列全体の解釈は両者により異なっているが、表意的に用いられたルーン文字自体には略奪に対する財宝の守護という呪術的なコノテーションがあるという点に関しては意見が一致している。

初期の碑文だけではなく、時代が下がる古英語の写本において用いられたルーン文字の中にも同様のコノテーションが想定されうる用例が存在する。冒頭で言及した Bald's *Leechbook* における lencten adl 'spring fever' への対処に関する記述がそれであり、該当箇所は Eft godcund gebed / In nomine dei summi sit benedictum **deereþ**. N7. PTX **der**Fw N7. PTX. となっている。[4] ここではラテン文字、ギリシャ文字、ルーン文字が併用されているが、ボールドの部分が写本においてはルーン文字で記載されている箇所である。M.L. Cameron は上記の箇所に関して、'It is almost as if the magician was hedging his bets by invoking both heathen and Christian aids.' と述べて、ルーン文字の持つ呪術的な力が意図されていると主張している。[5]

しかしながら、時代が下がる古英語の文学作品におけるルーン文字の使用に関しては、碑文におけるような特別なコノテーションを想定することに懐疑的な意見もみられる。I.R. Page は、上記の *Leechbook* における用例以外にはほとんどの呪文的な要素を含む医学書においてルーン文字が使用されていないとして、'it is dangerous to assert that the Anglo-Saxons in general believed they could call up supernatural powers by cutting, painting or naming runes' と述べている。[6] このように Page は、古英語の文献においてルーン文字が呪術的な効果を期待して使用されていたという考えに対して慎重な見方をしていることになる。

以上のように、初期のルーン碑文における呪術的なコノテーションは認められているものの、古英語の文献において用いられているルーン文字のコノテーションに関しては研究者の意見がしばしば分かれているのが現状である。古英語の文献におけるルーン文字の使用を詳しく見る前に、以下ではルーン文字が古英語に採用された過程について考えたい。

３．ルーン文字採用の過程

ルーン文字はキリスト教への改宗以前に使用されていた文字であるが、アングロサクソン・イングランドでは改宗後も直ちに根絶されたわけではなく碑文に限らず写本においてもむしろ積極的に採用された。これには、しばしば言及される教会の布教方針が深く関わっている。Bede (c.672-735) はイングランドの改宗にあたって Gregory I (c.540-604) が修道院長 Melitus に宛てたアドバイスを 'the temples of the idols in the said country ought not to be broken; but the idols alone which be in them.'[7] と記している。このような異教文化の表面的な存続に対する寛容ともいえる方針によって、ルーン文字も修道院で書かれる写本において積極的に採用されることとなった。

そのため純粋にキリスト教的なテキストにおいてルーン文字が使用されることは珍しいことではなかった。8 世紀頃のものとされる Ruthwell Cross におけるラテン文字とルーン文字の併用は、当時の社会におけるしっかりとした runic literacy を持った集団の存在をはっきりと示すものである。文字体系の観点からも、元来 24 文字であったゲルマン共通フソルクはアングロサクソン・イングランドにおいては新たな文字の追加により 33 文字にまで拡張している事実は示唆的である。

しかしながらルーン文字は時間の経過とともに次第に使用されなくなり、古英語時代の末期には容易に理解できない文字となっていた。商人や石工達が用いる印などに残ったものを除けば、碑文では 10 世紀にはルーン文字の使用は終わったと考えられる。[8] また、古英語時代の後期になると写本における写字生によるルーン文字表記の誤りが多く見られるようになる。このような流れから一般的には写本におけるルーン文字の採用は初期に多く、時代が下がるにつれて減っていくという過程が想定される。

ルーン文字のソーンがアングロサクソン時代の写本において使用された最も初期の記録は 803 年の Clofesho Council の charter であるが、[9] この文字はアルファベットに取り込まれて幅広く用いられているために多くの写本において比較をすることが可能である。以下ではソーンが採用された状況を見ることによって、写本においてルーン文字が採用される過程について考察したい。

宗教詩 *Cædmon's Hymn* は古英語韻文では例外的に 17 もの写本において保存されており、その時代も 8 世紀から 15 世紀にわたる。これらの 17 写本のうち 4 写本がノーサンブリア方言で書かれており、残りの 13 写本はウェストサクソン方言で書かれている。[10] 8 世紀前半の MS. Kk. v. 16, University Library, Cambridge および 8 世紀中頃の MS. Lat. Q.v.I.18, Public Library, Leningrad、また 12 世紀の MS.574, Bibliotheque Municipale, Dijon および 15 世紀の Cod. Lat. 5237, Bibliotheque Nationale, Paris などのノーサンブリア方言で書かれた写本においてはソーンは使用されていない。一方で、ウェストサクソン方言で書かれている 10 世紀の MS. Tanner 10, Bodleian Library、10 世紀後半あるいは 11 世初期の MS. 279, Corpus Christi College, Oxford およびその写しであるとみられる 11 世紀後半の MS. Kk. iii.18, University Library, Cambridge においてはソーンが用いられている。以上のことから、*Cædmon's Hymn* の各写本においては、ソーンが採用されるかどうかは時代が早いか遅いかに関わらず方言の違いによっていることが分かる。

同じく多くの写本が残されている *Bede's Death Song* は 29 写本が現存しているが、そのうちの 11 の写本はノーサンブリア方言で、17 写本がウェストサクソン方言であり、残りの 1 写本が両者の中間の方言となっている。[11] この作品の冒頭にある For þam に関しては、ウェストサクソン方言の写本である 12 世紀の MS. Digby 211、Bodleian Library, fol. 108a, col.2 および 14 世紀の MS. R.5.22, Trinity College, Cambridge, fol.43b, col. 1 ではソーンが使用されているが、12 世紀の MS. R.7.28, Trinity College, Cambridge, page 26, fol.13b および同じく 12 世紀の MS. Bodley 297, Bodleian Library, page 281, col.2 においてはソーンではなく th で書かれている。これに対して、同箇所の For þam に関してノーサンブリア方言の写本である 9 世紀の MS.254, St. Gall, page 253, col. 1、12 世紀の MS. 225, Admont, fol. 249b、16 世紀の Cod. Lat. 14603, fol. 138a などにおいては、どの年代の写本においてもソーンは用いられておらず全て th で書かれている。

以上の写本におけるソーンの使用状況は、必ず

しも初めにルーン文字が多く用いられていたものが次第にラテン文字に変わっていったというわけではなく、地域差も関わっていることを示しているといえる。8 世紀のものとされる *Cædmon's Hymn* の写本 MS. Episcopi Norwicensis には時代が早いにもかかわらずソーンやウィンが使用されていないことについて、大沢一雄はソーンやウィンの採用はこの写本より後の時代のことだったという説と共に、ソーンやエズは異教徒のルーン文字であるからローマ教会の中では認められなかったという説を挙げている。[12] しかしながら、すでに見たような教会の異教文化に対する方針を考慮すれば、後者の異教徒の文字であるから認められなかったという理由は考えにくい。理由の確定は困難であるが、ルーン文字の採用に関しては初期に多く用いられていたルーン文字が漸進的に減少したという単純なプロセスではないことは明らかであるといえる。続いて以下では古英語時代の作品、写本におけるルーン文字の使用を概観し、どのような形式でルーン文字が採用されているのかを見ていきたい。

４．古英語の文献におけるルーン文字の使用

古英語の作品、写本において採用されたルーン文字はラテン文字に対する補助的な使用ではあったものの、その使用法も使用意図も多岐にわたっている。まず古英詩の諸作品、*Juliana*, ll.704-708, *Christ*, ll.797-807, *Elene*, II.1257-1269, *Fates of the Apostles*, ll.98-104 には作者である Cynewulf の名前がルーン文字で本文に組み込まれている箇所が存在する。この Cynewulf signatures と呼ばれる一連のルーン文字は、表音文字として作者の名前を表すのと同時に表意文字として本文の文脈においても意味を成している。また古英詩 *Riddles* 19, 24, 64, 75 などにおいては、解答となる単語に対するヒントがルーン文字で与えられている。ヒントの提示方法は一様ではなく、表音文字として逆順に読む場合や並べ替えて読む場合など様々である。さらに古英詩 *The Husband Message* の結びの箇所には部分的にルーン文字が書かれており、それらは S, R, EA,W, M の順番に配置されている。この詩は写本の保存状態をはじめとして解釈上の問題点が多い作品であるが、本文で使用されている上記ルーン文字列の解釈に関しても意見が分かれている。

古英詩以外でも、例えば韻文の *Solomon and Saturn* の写本においてもルーン文字が採用されている。この作品は二つの写本で残っており、CCCC 422 が写本 A、CCCC 41 が写本 B とそれぞれ呼ばれているが、[13] この写本Ｂでは人名 Solomon の mon の部分に m ルーンが用いられている。人名の後半部分に採用されている m ルーンは別の写本である CCCC 422 には見られないことから、このルーン文字は写字生自身の判断で用いられたのだと想定される。また、同じく写本 A においては *Pater Noster* がラテン文字に加えてルーン文字でも綴られている。

古英詩 *Waldere* の写本は二つの断片として残っており、それぞれ Fragment I と Fragment II と呼ばれているが、[14] このうちの Fragment II において写字生により o ルーンが用いられている箇所がある。写本の該当箇所ではルーン文字の部分にアルファベットの e の一部を書いた形跡が見られ、これを書いた写字生は元々はルーン文字ではなく単語 *eþel* を書こうとしていたことがわかる。このことから、このルーン文字は手本にあったものをそのまま写したのではなく、この写字生自身の判断で書かれたものであると判断できる。

同様に、古英詩 *Beowulf* の写本においても写字生によりルーン文字が採用されている箇所がある。*Beowulf* の写本 Cot. Vitellius A.xv は二人の写字生に

よって書かれており、一人目の写字生 A は散文の初めから *Beowulf* 1939 行目の scyran までを、二人目の写字生 B は同行の moste から *Judith* の終わりまでを書いている。[15] 同写本中３か所で o ルーンが使われているが、これはすべて一人目の写字生 A が書いた部分であり、写字生 A はこの単語 eþel が出てくる所には与格形で eþle と変化する場合を除いてすべてルーン文字を使用していることになる。一方、二人目の写字生Ｂの写した部分はすべて単語 eþel が書かれており、ルーン文字は使われていない。このことから、*Beowulf* の写本で用いられている o ルーンもまた手本にあったものを写したのではなく、写字生 A が自分の判断によって用いたものだと考えることができる。[16]

以上で概観したもの以外にも古英語の写本では様々な形でルーン文字が採用されているのだが、写本に見られるルーン文字は二つのタイプに大別される。一つは作品の著者が制作段階で何らかの意図をもって組み込んだものであり、テキストの解釈とも関わっている場合が多い。そしてもう一つは写字生が作品を写す際に自身の判断で採用したものである。これらはしばしば写本におけるルーン文字として一括りに扱われるが、両者には時代の隔たりが存在すると共に使用意図が異なっており個別に検討されるべきである。以下では、これら二つのタイプのルーン文字使用の意図とその背景をそれぞれ詳しく見ていくことにする。

５．作者によるルーン文字の採用と runic literacy

まず著者によって作品中で採用されたルーン文字の中で上述の Cynewulf signatures は、Exeter Book に収められた *Juliana* と *Christ* および Vercelli Book に収められた *Elene* と *Fates of the Apostles* においてみられる。これらの作品は８世紀後半から９世紀に Mercia あるいは Northumbria において書かれたとされており、作者である Cynewulf が自らの名前をルーン文字で作品に埋め込んだ意図は、作品を読むあるいは聴く人に名前を記憶してもらうことにあったと考えられている。[17] このような用法においては、ルーン文字とその名称が理解できない場合には目的が果たせないため、読者あるいは聴衆はルーン名と詩人の名前を難なく理解することができただろうと想定される。この作品が書かれた当時はルーン文字の体系的な知識が行き渡っていたと考えるのが自然であり、古英詩 *Rune Poem* のようなルーン文字に関する一種の mnemonic verse が残されていることもそれを裏付けるものである。

一方で、これらの作品に関わった写字生のルーン文字に対する知識に関しては事情が異なっている。Vercelli Book における Cynewulf signatures を構成しているルーン文字は全体的にしっかりと書かれているが、写本において w ルーンと l ルーンの前には一度消した跡があり、写字生はできるだけ忠実にルーン文字を写そうとしていた形跡が見られる。[18] これと比較して Exeter Book におけるルーン文字は形がやや不完全である。Exeter Book の写字生は g ルーンをラテンアルファベットの x と考えており、また u ルーンおよび c ルーンもしっかりと書かれていないため別のルーン文字に見えるほどである。どちらの写本も書かれたのは 10 世紀の後半とされており、両者は同時代に属している。Vercelli Book の写字生のルーン文字は正確に書かれているが、全体的な傾向から正確にコピーをする傾向がある写字生であった可能性が高いとされているためにルーン文字のしっかりした知識があったと断定することはできない。また Exeter Book の写字生に関しては、ルーン文字の知識が乏しかったことは明らかである。Cynewulf signatures について言えば、作品の著者と写字生

の属している時代の差がそのまま両者の runic literacy の差に反映されていると考えられる。

医学書である *Leechbook* は 9 世紀に書かれたものであるとされるが、すでに引用した箇所ではラテン文字とギリシャ文字に加えてルーン文字が使用されており、キリスト教的な祈りと組み合わされている。このルーン文字使用の意図については上述のように研究者の間で意見が分かれているが、類例が存在しないため呪術的な力を意図して使用されていると断定することは難しい。しかしながら、祈りと共に効能を求めるテキストの性質から考えても文字自体が持つ呪術的な力への信仰の名残りである可能性はあるだろう。

一方で 10 世紀中頃のものとされる *Leechbook* の写本自体においてはルーン文字がはっきりと書かれておらず、写字生は自身が写している文字が何であるのかを理解していなかったと考えられる。これは写字生が置かれた環境においてはすでにルーン文字の知識が衰退していたことを示すものである。ここでも作者と写字生の runic literacy にはおそらく属する時代の違いに起因する大きな隔たりが存在することになる。

すでに概観したように、Exeter Book に収められている古英詩 *Riddles* においては本文に埋め込まれたルーン文字によって解答のヒントが様々な仕方で示されており、例えば *Riddle* 24 では結びの部分においてヒントが示されている。そこでは文字列は G,A,R,O,H,I の順番に本文に組み込まれており、これを並べ替えると解答である higoræ 'magpie' が導き出されるといった具合である。本文では「6 個の文字が示すように呼ばれている」と記されており、ここではヒントの解釈にルーン文字の名称は関係しておらず表音文字として認識できることが条件となっている。

同様に *Riddle* 19 ではさらに多くのルーン文字により解答へのヒントが与えられている。ルーン文字は 4 つの部分に分かれており、それぞれの文字列は SROH, NOM, AGEW, COFOAH である。写本に解答が記されていない古英詩 *Riddles* ではしばしばあるようにこの解答に関しても意見が分かれているが、それぞれのルーン文字列を逆から読むと hors, mon, wega, haofoc という一連の単語が導き出され、一般的には 'a man on horseback with a hawk on his fist'という解答が想定されている。

また *Riddle* 75 に書かれているルーン文字は d,n,u,h であり、この場合は逆から読むことによって hund が解答であると推測できる。しかしながら、写本においては三番目のルーン文字が明確に書かれていないためにかつては多くの研究者はこれを l と読んでいた。[19] このような写本におけるルーン文字の曖昧さや誤りは *Riddle* 36 にも多く見られるものであり、ルーン文字列を作品に組み込んだ著者と比較して写字生のルーン文字に対する知識の乏しさを示すものである。

上記のような *Riddles* におけるルーン文字は一種の cryptographic system として用いられていて、すべて表音文字として使用されているものである。このように語順の変更によりヒントを提示する方法はラテンアルファベットによっても同様に行われており、例えば *Riddle* 23 では「agob は後ろからつづったわが名である」という記述により解答である boga 'bow'のヒントが示されている。*Riddles* におけるルーン文字を使用したヒントは表意的な解釈を必要としないものであり、その使用法はあくまでラテン文字と異なった外見を持つ文字としての特徴を利用した表面的なものにとどまっているといえる。また写字生にとっては解答のヒントを提示するために用いられているルーン文字はなじみのない文字体系であったことがうかがわれる。

Riddles と並んで Exeter Book に収められてい

る古英詩 *The Husband Message* の結びの部分に用いられているルーン文字は、S, R, EA,W, M の順に配置されている。最後のルーン文字は写本では判読できない状態のためにかつては d ルーンと解釈される場合もあったが、現在は一般的に m ルーンであるとされている。[20] このルーン文字列の解釈に関してはこれまでに多くの意見が出されたが、いまだに決着がつけられていない。初期の研究はしばしば人名として解釈しており、[21] また W.J. Sedgefield はルーンの順序を入れ替えて表音文字として読み sweard [22] と解釈している。一方、R.W.V. Elliot は表意文字として扱い 'the runes epitomizes the main themes of the poem' と述べて、詩の主題の要約であるとしている。[23] ルーン文字列の意味がはっきりしないためコノテーションを推測することはできないが、物語の結びの部分に使用されているこのようなルーン文字列は本文の解釈とも密接に関わっていると想定するのが自然である。そのためここでも詩の理解にはルーン文字の知識が前提となっていると考えることができる。

以上で見てきたように、作者によって採用されたルーン文字の用法はしっかりとした runic literacy を有する集団の存在を強く示唆するものであった。しばしば誤記が見られる写字生とは異なり、作者はルーン文字に対する正確な知識を持っており、また読者あるいは聴衆も runic literacy を有していることが前提になっていると考えられる。しかしながら、一方でコノテーションの観点からは呪術的な用法はほとんど見られず、ルーン文字が用いられている箇所は異教への言及とは全く関わっていない。すでに引用した Gregory I の 'the temples of the idols in the said country ought not to be broken; but the idols alone which be in them.'という方針はルーン文字の採用にもそのまま当てはまるものであるといえるだろう。

６．写字生によるルーン文字の採用と runic literacy

写字生のルーン文字に対する知識が乏しい場合があることはすでに見たが、ここでは写字生によって書かれたルーン文字について詳しく見ていくことにする。時代が下がると、写字生が自分の書いているルーン文字を理解していなかった形跡がしばしば見られるようになる。11、12 世紀頃に二人の写字生によって書かれた写本 Cot. Domitian A9 [24] にはフサルクとそれぞれに対応するラテン文字、そしてルーン名が書かれたページが存在するが、そのフサルクとルーン名の対応には誤りが見られる。ここで二人目の写字生Ｂはいくつかのルーン名を誤って書いており、m ルーンの部分に d ルーンの名称である deg を、反対に d ルーンの部分に m ルーンの名称である mann を書いている。また、o ルーンの部分には本来 *eþel* という名称が書かれるべきであるが、何も書かれていない。このことから、写字生 B は、o ルーンの名称を理解していなかったと考えることができる。

また、同時代の写本 St. John's College MS 17 [25] には北欧のルーン文字や暗号のためのアルファベットなどと共にイングランドのフサルクとルーン名が記載されているが、ここでも誤りが散見される。これを書いた写字生は e ルーンの部分に、おそらくその形がアルファベットの m に似ているために誤って m で始まる mech という単語を書いている。また、m ルーンの部分には反対に e ルーンの名称を誤記している。これらのことから、この写字生もまたルーン文字とその名称について理解が乏しく、正確な知識を持っていなかったと考えられる。以上のような写字生の明らかな誤記は、これらの写字生が属する時代にはルーン文字の知識は一般的ではなく曖昧なものになっていたとい

う事実を示すものである。

しかしながら一方で、正確なルーン文字の知識を有していた写字生によるものと思われる使用例もいくつか存在する。*Poetical Dialogues of Solomon and Saturn* は Pater Noster をテーマの一つにしているが、２つの現存する写本のうちで MS. A と呼ばれ 11 世紀頃のものとされる MS. Corpus Christi College 422 では、Pater Noster の文字がルーンで綴られている。このルーン文字の使用は研究者の関心を集めており、コノテーションに関してしばしば言及がなされてきた。例えば Louis J. Rodrigues は、 'It is significant that the warrior letters in MS A are given their runic form, for the magic power of the rune was a deep-seated belief of the Germanic peoples,' と述べており、[26] 呪術的なコノテーションと関連付けている。また R. J. Menner も、ルーン文字自体が呪術的な力を持っていた異教の伝統の名残りであるとして同様の指摘をしている。[27] しかしながら、この作品におけるルーン文字は二つある写本のうち MS. A にしか見られないことから、このルーン文字は MS. A の写字生自身の判断によって書かれたものである可能性が高い。また、写本において該当するルーン文字はアルファベットと併記されておりルーン文字がなくても成り立つものである。そのため Derolez も'ornamental, with at the most an archaic, pagan or cryptic, flavour'[28] と述べているように、装飾としての視覚的な効果を意図したものと考えるのが適切であるように思われる。呪術的なコノテーションは別として、このルーン文字を書いた写字生はルーン文字に関してある程度の知識を有していた可能性があると考えることができる。

さらに、上述の *Solomon and Saturn* の写本 CCCC 41 で人名 Solomon の mon の部分に使用されている m ルーンに関して Katherine O'Keeffe は、写字生がルーン文字と省略記号を採用した意図をいずれも視覚的な強調のためであると指摘している。[29] 写字生によって用いられたルーン文字にはこれらのような視覚的な効果のみが意図されているものが見られるのも、文学作品の著者によって採用されたルーン文字との相違点である。

また、すでに詳しく見たように紀元 1000 年頃のものとされる *Waldere* および *Beowulf* の写本においては o ルーンが表意的に使用されているが、このことは時代が下がっても一部の写字生はルーン文字とその名称に対する正確な知識を持っていたことを示すものである。このような表意文字としてのルーン文字の使用は他にも見られ、*Durham Ritual* や *Lindisfarne Gospels* では写字生 Aldred によって 10 世紀後半に書かれた行間注釈において、m ルーンと d ルーンがそれぞれの単語を書く代わりに用いられている。[30] 同じく 10 世紀後半に書かれた Exeter Book に含まれている古英詩 *The Ruin* では m ルーンが、また Alfred's *Orosius* の Lauderdale MS では o ルーンがそれぞれ用いられている。これらの表意的なルーン文字の使用は、写本におけるスペースの節約を除くと採用の意図がはっきりしない場合も多い。[31]

以上で見てきたように写字生自身の判断によって採用されたルーン文字には様々なものがあるが、使用には写字生による個人差が大きくまた使用意図が明確でないこともある。一般的には時代が下がるほど写字生のルーン文字の知識は曖昧なものとなる傾向はあるが、一方でいくつかの用例は写字生の中には時代が遅いのにもかかわらずルーン文字に対する正確な知識を持つ者もいたことを示している。

7. まとめ

古英語の文学作品の作者によって採用されたル

ーン文字の用例は、ルーン文字に精通していた知識人が多くいたことを示している。また、そのようなルーン文字の使用はルーン文字を理解できる読者あるいは聴衆が前提となっているものである。しかしながらコノテーションの観点からは、碑文におけるような特別なコノテーションが想定される用例はほとんど見当たらない。

一方で写字生のルーン文字に対する知識は曖昧である場合も多く、誤記も散見される。しかしながら、時代が遅くても正確な知識を持った写字生も見られ、ルーン文字の知識が一部の写字生の間に伝えられていた形跡がある。また、視覚的な効果のみを意図したルーン文字の使用も写字生に独特のものである。

均質的な literacy が想定されうる印刷術の導入以降の時代と違い、ルーン文字が採用されるかどうかは必ずしも年代によっているのではなく地域差、個人差にも多く依存している。また、呪術的なイメージを付与されがちなルーン文字であるが、古英語の文献では特別なコノテーションを伴った用例はほとんど見られない。ルーン文字は Gregory I によるイングランドにおける布教の方針通りに、付随する異教文化の本質部分を取り除いた形で導入されたといえるだろう。

(注)

1. Kylver 墓石に関しては、ラーシュ・マーグナル・エーノクセン、荒川明久訳『ルーン文字の世界』(東京、国際語学社、2007 年)、p.35 を参照。
2. Wolfgang Krause, *Die Runeninschriften im älteren Futhark*, 2vols. (Göttingen: Vandenhoeck&Ruprecht, 1966), pp.93-94.
3. Karl Schneider, *Die Germanischen Runennamen: Versuch einer Gesamtdeutung* (Meisenheim: Verlag Anton Hain K.G., 1956), p.523.
4. 写本に書かれているルーン文字列が明瞭ではなく、校訂者によって読みが異なっている。引用は R. Derolez, *Runica Manuscripta: the English tradition* (Brugge: De Tempel, 1954), p.417 に拠った。その他の解釈は Oswald Cockayne, *Leechdoms, wortcunning, and starcraft of early England*, 3vols. (Chippenham: Thoemmes Press, 2001)および M.L. Cameron, *Anglo-Saxon Medicine* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006)を参照。
5. Cameron, pp.133-134.
6. I.R. Page, *An Introduction to English Runes*, 2nd. ed. (Suffolk: The Boydell Press, 1999), p.112.
7. 引用は Bede, *Ecclesiastical History of the English Nation,* trans. J.E. King, Vol. 1 (Cambridge: Harvard University Press, 1930) に拠った。
8. R.W.V. Elliott, *Runes: An Introduction* (Oxford: Manchester University Press, 1959), pp.44, 75.
9. Maureen Halsall, *The Old English Rune Poem: a Critical Edition* (Toronto: University of Toronto, 1981), p.107.
10. *Cædmon's Hymn* の各写本に関しては *ASPR* VI, p.xciv を参照。
11. *Bede's Death Song* の各写本に関しては *ASPR* VI, pp.c-ci を参照。
12. 大沢一雄『アングロ・サクソン法典』(東京、朝日出版、2010 年)、pp.23-24.
13. *Solomon and Saturn* の写本に関しては Robert J. Menner, *The Poetical Dialogues of Solomon and Saturn* (London: Oxford University Press, 1941)を参照。
14. *Waldere* の写本に関しては *ASPR* VI, p.xix および F. Norman, *Waldere* (London: Methuen

&Co. Ltd., 1933), p.39 を参照。

15. *Beowulf* の写本に関しては *ASPR* IV, pp.ix-xx を参照。

16. 同じ写字生 A は、写本で *Beowulf* の前にある散文のうちのひとつ *Letter of Alexander the Great to Aristotle* においては単語 eþel をそのまま書いており、ルーン文字は用いていない。[Stanley Rypins, ed. *Three Old English Prose Texts in MS Cotton Vitellius A.XV.,* Early English Text Society, o.s.,161 (London: Oxford University Press, 1971)]

17. Cynewulf signatures に関しては Rosemary Woolf, *Cynewulf's Juliana* (Exeter: University of Exeter Press, 1993), pp.8-11 を参照。

18. 写本の状態については、Derolez, p.393, 396 を参照。

19. Derolez, p.419.

20. *The Husband Message* の写本に関しては Anne L. Klinck, *The Old English Elegies: a critical edition and genre study* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1992)を参照。

21. 例えば Nora Kershaw は 'the runes represent the initials of five personal names' としている。[Nora Kershaw, *Anglo-Saxon and Norse Poems* (Cambridge, 1922), p.42.)]

22. W.J. Sedgefield, *An Anglo-Saxon Verse-Book* (Manchester, 1922), p.159.

23. R.W.V. Elliott, 'The Runes in The Husband's Message', *JEGP,* 54(1955).

24. Cot. Domitian A9 に関しては Derolez, pp.3-16 を参照。

25. St. John's College MS 17 に関しては Derolez, pp.26-34 を参照。

26. Louis J. Rodrigues, *Anglo-Saxon Verse Runes* (Felinfach: Llanerch, 1992), p.30.

27. Menner, p.48.

28. Derolez, p.420.

29. Katherine O'Brien O'Keeffe, *Visible Song: transitional literacy in Old English verse* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990), p.73.

30. R. Derolez, '*Runica Manuscripta* Revisited' in Alfred Bammesberger, *Old English Runes and their Continental Background* (Heidelberg: Carl Winter, 1991), pp.88-89 を参照。

31. *Lindisfarne Gospels* におけるルーン文字の使用を扱った R.D. Eaton も、使用されているルーン文字には特別なコノテーションは見られず、ほとんどの場合はあまり重要ではない単語に対して用いられており、意図がはっきりしない場合や恣意的に使用されることがあるとしている。[R.D. Eaton, 'Anglo-Saxon secrets: Run and the runes of the Lindisfarne gospels', *Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik*, vol. 24 (1986) pp.11-28.]

（受理　平成 29 年 3 月 10 日）